様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １８ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５４６３６２３

研究課題名（和文）在日ブラジル人妊産婦の心身の健康状態とその社会的意味づけ及び対処行動について

研究課題名（英文）Physical and Emotional Distress Brazilian Pregnant or Postpartum Women and Cultural Characteristics Regarding How they Cope With Stress

研究代表者
畑下　博世（HATASHITA, HIROYO）

三重大学・医学部・教授

研究者番号：５０２９０４８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：在日ブラジル人妊産婦を対象に、「どのような心身の健康状態を体験しているのか、それについて対象者はどう解釈し、意味づけているのか、どのような対処行動を取ろうとしているのか」を明らかにすることを目的とした。彼女たちは、様々なストレス症状を呈し、日本にいながらブラジル人社会で交流が完結するという状況下で逞しく生活していた。また、両親との密接な関係や宗教の影響などの文化的背景が社会関係や対処行動に影響していることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify (1) what physical and emotional distress Brazilian pregnant or postpartum women underwent in Japan, (2) how they interpreted it, and (3) what action they took against it. Our findings are as followed: they showed various stress symptoms; and they have sturdily resided in Japan within Brazilian community and were not likely to relate with Japanese although they live in Japan. Our study also unveiled that their social relation and coping behavior were affected by their cultural background involved in their religion and tight parent-child relationship.

研究分野：地域看護学

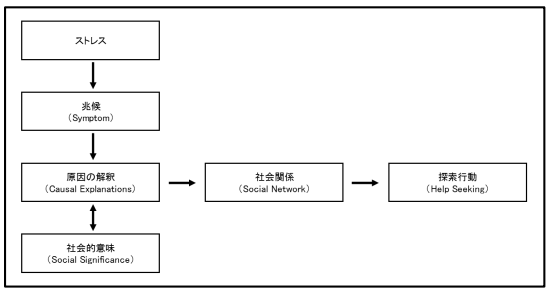
キーワード：異文化看護　ブラジル人

１．研究開始当初の背景

研究代表者は 2007 年度以降、A 県在住のブラジル人妊産婦の日常生活と健康上の課題を明らかにし、異文化ケアの指針をマニュアル本として作成した。また、健康相談を通じて関係機関とサポートネットワークを構築してきた。しかしながら、日本人である研究代表者らが明らかにしたブラジル人妊産婦の健康課題について、必ずしもブラジル人妊産婦自身もそれを課題として捉えているわけではないという点、もしくは日本人妊産婦への支援と同じアプローチではうまくいかないという点について検討する必要がある。なぜなら、人々の健康意識や行動は文化の適応への結果であり、認知、感情、行動は幼少期からの文化適応のプロセスを通じて促進されるからである。この視点に基づき、困難に直面したとき、自らが持っている文化と環境の間で、それをどの様に意味づけ・解釈し、行動するかについての詳細は明らかになっていない。

２．研究の目的

本研究では「文化と女性の健康」という視点から、在日ブラジル人妊産婦を対象に、「どのような心身の健康状態を体験しているのか、それについて対象者はどう解釈し、意味づけているのか、どのような対処行動を取ろうとしているのか」を図１の枠組みの考え方に基づき明らかにすることを目的とする。



（図１）探索行動の文化要因モデル

この枠組みは、「心身兆候の経験」、「文化的意味の解釈」、社会関係（ソーシャルネットワーク）、救済探索（ヘルプシーキング）間の関連についてアメリカ在住の日本人女性を対象として、ＮＩＨの研究（主任研究者 Denise M.Saint Arnault,PhD）により開発された。「文化は必然的に、健康や苦悩の認識、解釈、コミュニケーションとソーシャルサポート、結局はすべてのヘルプシーキングの行動に影響するものである。つまり、文化のフィルターを通した」ものであるを基本とする。本調査では、在日ブラジル人の文化を考慮した行動を探求する。既に日本人やアメリカ人を対象とした研究結果が出ているため、その結果と本調査のデータを比較・考察する。なお、Saint Arnault 博士は今回の研究の連携研究者であり、質問紙やインタビューガイドライン等を用いることの許可は得ている。

３．研究の方法

(1) 質問紙調査は、産科クリニック・教会・集会におとずれたブラジル人妊産婦へ研究の趣旨を説明し、協力を依頼する。質問紙では属性、心身の自覚症状、ソーシャルサポート満足度、ストレス対処能力、クオリティ・オブ・ライフ、ヘルプシーキング(対処行動)の各尺度を用いる。

(2) インタビュー調査は、質問紙調査回答者のうち参加を表明した者を対象とする。インタビューは、身体面・精神面・感情についての症状とそれへの意味づけ、ストレスを感じた時の対処方法、人間関係や他者からのサポート、助けを求めた経験、自己管理とその効果等についてたずねる。なお、インタビューは対象者の承諾を得て録音する。ボディマップ・ライフライン調査を併用する。

倫理的配慮

日本語が堪能な研究参加者以外にはポルトガル語の通訳者を介して説明を行った。研究参加者に対し、文書を用いて口頭による研究目的、倫理的配慮の説明を行い、同意書にサインを得た。任意性を強調し、少しでも躊躇する場合は回答しなくてもよいことを説明した。また、通訳者には守秘義務の厳守について誓約書を取り交わした。なお、本研究は三重大学倫理委員会の承認を得た。日本語が堪能とは、質問紙調査において、①理解力、②流暢さ、③語彙、④発音、⑤文法にネイティブと同様と回答した者である。

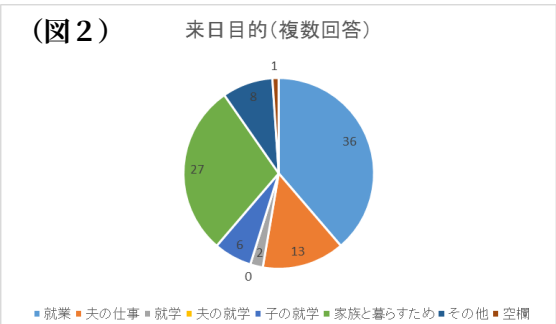
４．研究成果

(1) 質問紙調査

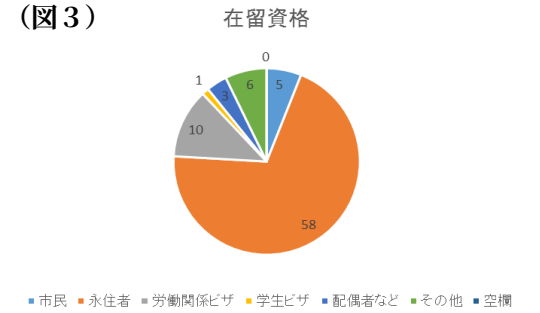
合計 83 人から回答を得ることができた。データは分析中であるが、回答者の属性を集計したところ、下記のとおりであった。

平均年齢		30.7 歳
平均滞在年数		11.7 年
国籍	ブラジル	60 人
	日系ブラジル人	21 人
	その他	2 人
既婚／未婚	既婚	72 人
	未婚	10 人
	その他	1 人

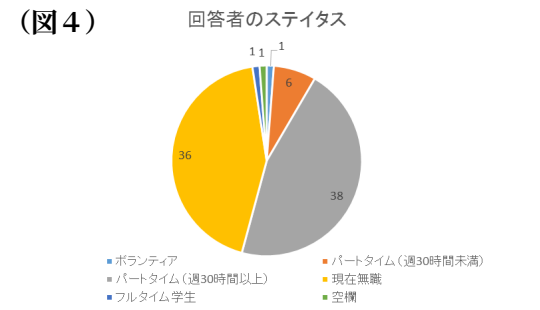
（図２）



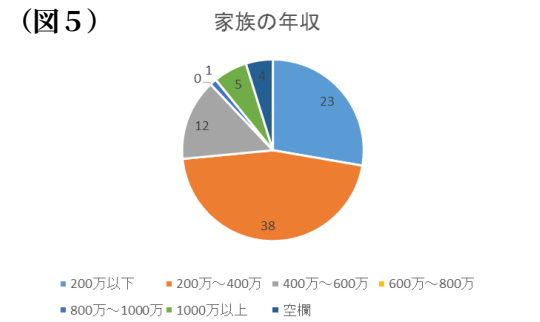
（図３）



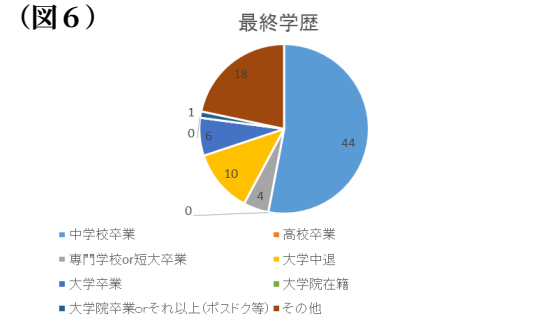
（図４）



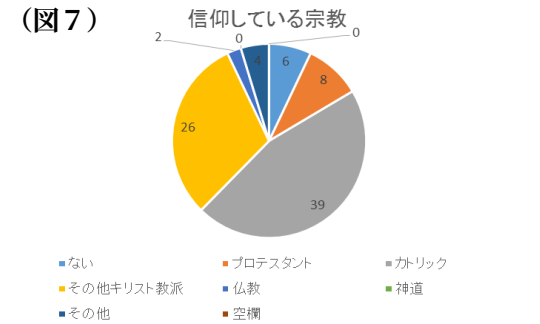
（図５）



（図６）



（図７）



(2) インタビュー調査

18 人にインタビューを行い、総時間数は 23 時間 33 分、平均時間は 1 時間 18 分であった。対象者の属性を下記に示す。

平均年齢　32.4 歳

平均滞在年数　12.6 年

国籍　ブラジル　11 人
　日系ブラジル人　6 人
　ブラジル・パラグアイ　1 人

既婚／未婚　既婚　14 人
　未婚　4 人

来日目的　就業　11 人
　夫の仕事　3 人
　家族と暮らすため　4 人
　その他　2 人

在留資格　永住者　12 人
　労働関係ビザ　6 人

回答者のステイタス
　パートタイム（週 30 時間以上）　3 人
　パートタイム（週 30 時間以上）　7 人
　現在は無職　8 人

家族の年収　200 万円以下　5 人
　200 万～400 万円　10 人
　400 万～600 万円　2 人
　1000 万円以上　1 人

最終学歴　中学校卒業　10 人
　専門学校 OR 短大卒業　2 人
　大学中退　2 人
　大学卒業　2 人
　その他　2 人

信仰している宗教
　プロテスタント　2 人
　カトリック　7 人
　その他のキリスト教宗派　9 人

先週 1 週間で感じた身体症状と精神症状の問い 49 項目を、「ほとんどない」「たまにある」「しばしばある」「ほとんどずっとある」を選択してもらった。「ほとんどずっとある」は、「肩と背中の痛み」が 6 人、「不満」が 6 人、「胃の調子が悪い」・「眠れない」・「いらいらする」・「心配」がそれぞれ 3 人、「食欲不振」・「虚弱」・「さみしい」がそれぞれ 2 人であった。対象者の全員が「たまにある」「しばしばある」「ほとんどずっとある」でなんらかの症状を示していた。

現在、質的データを分析中であるが、途中までの結果を表 1 に示す。

（表１）

	サブスタンスコード	
社会的意味	1	自分の実家の家族や子どもの存在が大切
	2	子どものころは、両親と一緒に過ごすことが幸せ
	3	夫が子育てや家事に参加する事が普通
	4	日本人の男性は家事を手伝わない
	5	夫から期待されている
	6	夫と婚姻関係はない
	7	夫と結婚はしているが、友人的な存在
	8	ブラジルでは妊婦検診に夫がついて行くのは普通
	9	産休・育休中の保障の不安
	10	出産後は、再び働きに行く
	11	自分は日本語を話せなくても不自由しない
	12	ブラジルで教育を受けてから来日
	13	日本に来日後仕事をして日本語を学んだ
	14	日系の家族に日本語を学ぶように言われた
	15	ブラジルに帰国する予定で生活している
	16	日本は交通法規遵守が前提
	17	日本は治安が良い
	18	日本は教育が良いので、日本で教育を受けさせる
	19	子どもが日本の教育機関に通っている
	20	日本が好き・馴染んだ
	21	仕事がある
	22	健康問題が起こった時に頼れる人がいない
	23	日本の医療文化に馴染もうと努力している
	24	医師の対応を冷たく感じる
	25	妊産婦の活用できる支援を活用できない
	26	ブラジルには保健師が存在しない
	27	行政の仕組みが難しい
	28	体の事や赤ちゃんのことを男性通訳に相談し辛い
	29	宗教の存在は大きい
	30	宗教が人生を変えるきっかけとなった
	31	宗教を広める仕事をして頼られている
ネットワーク	32	宗教が家族・親族との繋がりを良くした
	33	子どもを通しての友人関係は浅い
	34	自分の事を良く思わない人とは距離を置く
	35	近所付き合いはしていない
	36	友達もなく家族も遠い
	37	友達は少ない
	38	友達は一人だけ
	39	友達には頼れる
	40	周囲に期待される役割がある
	41	ベビーシャワーというイベントがある
	42	教会関係の友人が多い
	43	多くのブラジル人の友人がいて淋しくない
	44	仕事で知り合った日本人の友人と連絡を取り合っている
	45	日本人の友人が助けてくれるが、遠慮もある
	46	いとこには頼れる
	47	日本にいる親族の支援を受けたい
	48	近くに住んでいない親族は交流が少ない
	49	日本にも親族がいる
	50	義母との適度な関係
	51	両親と連絡を取り合っている
	52	心から頼れる母親の存在
	53	頼れる父親がいる
	54	子どもが大きくなったのは両親のおかげ
	55	両親が家事や育児を手助けしてくれる
対処	56	自分の両親に何でも相談する
	57	夫とのコミュニケーションを多く取る
	58	悩み事は友達に相談しない
	59	宗教が拠り所
	60	教会の仲間や牧師さんに悩みの相談をする
	61	話すと楽になる
	62	心理カウンセラーを頼る
	63	忙しい夫に頼れない・夫が忙しく頼れない
	64	ひとりで抱え込む
	65	両親に心配をかけない
	66	ストレスはあるが落ち込むことはない
	67	日頃の楽しみがある
	68	コミュニケーションを取るために日本語を学ぶ

(3) 日米合同会議及及びワークショップについて

研究協力者であるミシガン大学 Denise M. Saint Arnault 博士とのミーティングを２０１６年３月２９日（火)、三重大学において開催することができた。内容は、研究方法と分析の妥当性及び抽出されたテーマについての話しあいであった。

予定していたワークショップを開催することはできなかった。しかしながら、Saint Arnault 博士は同様の内容の調査を他の国で

も実施しているため、今後は、比較研究結果を学会や論文として発表する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）
① 畑下博世、在日ブラジル人妊婦のソーシャルネットワークについて、日本公衆衛生学会、2014.11.6、栃木県総合文化センター（栃木県・宇都宮市）

６．研究組織
(1)研究代表者
畑下　博世（HATASHITA HIROYO）
三重大学・医学部・教授
研究者番号：50290482

(2)研究分担者
マルティネス　真喜子（MARTINEZ MAKIKO）
京都橘大学・看護学部・講師
研究者番号：10599319
（H27 年 3 月まで分担者として参画）

西出　りつ子（NISHIDE RITSUKO）
三重大学・医学部・准教授
研究者番号：50283544

南　唯公（MINAMI YUUKO）
順天堂大学・スポーツ健康科学部・講師
研究者番号：50582110
（H25 年 10 月まで分担者として参画）

鈴木　ひとみ（SUZUKI HITOMI）
京都学園大学・健康医療学部・准教授
研究者番号：60462008